

は当然のことでも、第三者が読む場合、意外に別の解釈をされるものである。(2) 日本語では主語述語の対応が比較的あいまいでも通用するが、技術報告としてはこの対応関係をはっきりさせるべきである。(3) 文と文、パラグラフとパラグラフ、節と節のつながりに論理性をもたせ、論理の追従に読者側に負担をかけないように心がけること。

6. 私が気象台に入る直前に、恩師が「地球物理学はなまの自然現象を扱うのだから、観測を大事にするように。物理のようにもう一度条件を整えて実験や測定をし直すことはできないのだから」と言われたことを、今も私の脳裏に大切にしまっている。電子計算機によって数

値“実験”が可能になったとは言え、考え方の正否は観測との照合によって決められることを思うと、恩師の言葉は今も生きているものと思う。

しかし、調査研究の方法というものは、時代によっても変わり得るものではないかという気もする。計算機が発達した今日では、労力をかけて計算しただけでは意味のないこともある。気象学の発達段階により主要なテーマも変わり、それに応じて調査研究のやり方も変わるものだろう。しかし、努力しなければ何も得られないということだけは確かである。努力しても良い成果が得られないかも知れないが、その時は、自分が心を燃やして努力した事自体に満足すべきである。



畠山久尚著 気象と火災

——日本の風土と火災——

全国加除法令出版、1978年、23頁、950円。

本書は、日本火災学会25周年の記念出版物の一つとして出されたものである。著者は、元気象庁長官であり、日本火災学会の会長にもなられたことがあり、気象と火災との関係についても多くの論文を書かれている。

本書では、長年の研究を踏まえ、気象と火災との関連をいろいろの面から解説したものである。その特徴は、多くの実例をあげ、具体的に解説していること、また、火災と気象との関連を解析的に示していることなどであろう。たとえば、振袖火事、お七火事などの江戸の大火、関東大震災の折りの被服廠における炎の旋風などについても、かなり詳しく述べている。また、火災実験の結果についても触れている。したがって、気象と火災との関連が具体的に理解しやすい。

その目次を紹介するとつぎの如くである。序章、燃焼と消火、日本における火災の実態、火災と気象、火事がつくる気象、火災のシミュレーション

多くの人にすすめたい本の一つである。

(高橋浩一郎)